文化映画紹介

考えてみよう差別の歴史①②③

映学社作品

渡部実

【スタッフ】企画・製作統括／髙木裕己　脚本・演出／細見吉夫　撮影／照屋真治、川端智、白土和彦、宇都宮俊治　イラスト／中野耕一　CG／正者章子　ナレーター／一色令子　映像提供／アフロ、ピクスタ　協力／吉野ヶ里歴史公園、三内丸山遺跡センター、皮革産業資料館、岐阜市歴史博物館、東京医科歯科大学、渋染一揆資料館、岡山大学附属図書館　監修／全国部落史研究会顧問・桃山学院大学名誉教授　寺木伸明、静岡大学教授　黒川みどり　制作・著作／株式会社映学社　完成／2020年　DVD　①24分　②21分　③22分　文部科学省選定作品

【内容】今回は前回の「私のはなし　部落のはなし」（本誌1909号掲載）に続いて日本における部落差別というものを学校教材の視点からまとめた作品を紹介したい。鑑賞対象年齢は中学生以上・一般向けとなっていて、「考えてみよう差別の歴史」の題で、1巻から6巻までシリーズ化されている。一般の大人が鑑賞しても改めて日本の部落差別、その発生の事実と歴史について多くの発見があり、教えられるところもある内容である。なお紙面の分量の都合上、割愛せざるを得なかった部分もあることをお断りしておきたい。

前号紹介の長篇記録映画「私のはなし　部落のはなし」は、いまだに日本人の意識の中にある部落差別の問題を、今日の視点でインタビューを敢行し、当事者から忌憚のない意見を聞き出したもので、とりわけ、若い人たちの率直で屈託のない意見が新鮮に響いたものだった。

今回の作品は部落差別の問題を歴史的、社会的な観点からまとめようとする意図を持って作られたものである。

全6巻からなるシリーズのうち、今回は1巻から3巻までをご紹介したい。構成は、次のとおり。

①古代の身分と差別
1章　人類の誕生から縄文時代へ／2章　弥生時代からヤマト王権成立／3章　律令制崩壊とケガレ観の発生

②中世のケガレ観と差別
1章　河原ノ者と差別／2章　絵図に見る被差別の人々／3章　芸能と庭師の仕事

③近世の差別と被差別民のくらし
1章　差別された身分／2章　解体新書の陰で／3章　渋染一揆～権利の主張

今回のシリーズは、そもそも中学生向けとして作られているので、まず前提として日本国内において差別がどのように発生したかということをわかりやすく説明しなければならない。そこで映画は、①「古代の身分と差別」において、20万年前アフリカ大陸に人類（新人）が初めて誕生したというところから説明を始める。……世界中の人類は祖先が同じでただ1種類しか存在しない。新人は長い年月をかけて世界各地に住む場所を広げていった。約4万～3万5000年前、新人が日本に住み着く（推測）。1万年前に、日本は大陸から切り離され現在の形に近い日本列島が形作られる。新人は弓や槍を使って狩りをするようになり、その頃、イノシシやシカをしとめればみんなで分けあった、と考えられる。そして土器を使うようになる。土器には縄の文様が入っていることから縄文土器と呼ばれるようになった。縄文時代は指導者はいても身分の違いはなかった。みんなで助け合って暮らしていた。画面には三内丸山遺跡の写真、また平明なイラストも挿入される。画面には、今回の映画の監修者、である寺木伸明氏が登場し、当時の人々の生活を語る。

「生産力が低い狩猟採集の段階は集団が生活するのに最低限のものしか生産できない。もし誰かが独り占めをすると誰かが食べられなくなるので、飢え死にをする。そうなると集団の数が減り、労働力も減って独り占めすることが集団にとってマイナスになる。そういう社会では私的所有という個人の財産ができない」

すなわち、縄文時代では獲物は平等に分配されていたと考えられる。そこに貧富や身分の差別も見られなかったということだ。ところが西日本へ稲作農業が大陸から伝来するようになってくると、貧富や身分の差が生まれてくる。それが弥生時代である。①の2章「弥生時代からヤマト王権成立」では稲作が始まると土地の条件や技術の差によって、穫れる量や質などに違いが生じ、水田に欠かせない水を巡って争いも起きるようになった。画面は吉野ヶ里遺跡の写真を挿入しつつさらに説明を加える。弥生時代の稲作では柵が設けられ、掘割のような防御施設も見られる。戦争犠牲者の人骨も発見される。水争いのような戦いがはじまり支配者となった豪族は各地で勢力を争い、勝利することによって領土を広げていった。勝者が敗者を支配する。穫れた米の半分は勝利者のものだ。少しでも逆らえば奴隷にする。こうして支配者と被支配者の関係が生まれてきた。同時に身分の違いも生まれる。身分とは社会的地位に上下があることで、子や孫に引き継がれる。個人の能力とは関係なく、それは生まれながら決められている。4～5世紀頃の日本は、ヤマト王権によって国家が次第に統一されていった。渡来人または留学僧が大陸の文化を持ってくることで伝えられた文化の一つが、〝律令制〟である。律令制は中国の中央集権的な社会制度で、いくつもの政策によって国民を支配下に置く法律である。国民に一定の土地を貸し与え税を得る制度「班田収授法」をつくる。それから民を、良民と賤民に分け、上下の差別を設ける。それによって社会の秩序を保つようにする（良賤制）。さらに賤民は、陵戸、官戸、家人、公奴婢、私奴婢の5つ（五色）に分けられた。

今回のシリーズは監修者の話はもとより、情報量がとても多く、見ごたえが十分である。

個人的には、特に③の2章「解体新書の陰で」が印象に残った。被差別民は刑場で刑死人の死後処理をさせられる。また、老屠（屠畜を職業する老人）の中には、動物と同じように人体を扱う人もいて、人体について豊かな知識を持つ人が杉田玄白らの解体新書の刊行を助けたというのである。それらの人たちが日本の近代医学の発展に貢献したという事実をきちんと描いている点にも感心した。

問い合わせ／映学社　03－3359－9729